

水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年十二月

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
	青夏 京子	凡士 六弦	修 允孝	文 絵夢 亨		ひろし のり子 道を 允孝 風舎			かげろう		月を		航	音思
雨ぽつりたちまち豪雨波郷の忌	手相見の言葉優しき冬灯 <small>当たらなくなつていい。冬灯に救いと微かな暖かさを感じさせます。</small>	眼帯を取る日の不安冬霞 <small>白内障か網膜剥離か、同じ体験した者として共感。季語の幹旋が上手い。</small>	妻旅へ一人の空気冬ざるる <small>妻がいけないと殺風景で寂しい。久しぶりに妻から解放された気分を一人の空気と表現されたこといいですね。</small>	帰郷せし子らの匂ひの蒲団干す <small>帰省する子待つ母親の気持ち痛みほど分かる。親の深い情愛が伝わってくる。匂いをもいとおしい感じが伝わる。</small>	しばらくは憂きを忘れむ酉の市	ト口箱をはみ出す河豚の脹れ面 <small>水揚げ直後の新鮮な河豚が目につかぶ。「脹れ面」の表現がピツタリ。大変面白い俳句です。下五の脹れ面が効いています。滑稽かつ愛らしい河豚の膨れつ面が浮かんでくる。本意では、誰かを皮肉つてい</small>	両の手を広げて立てる爪冬芽	里恋のお煮しめ旨し一茶の忌	クリスマスプレゼントは要らないよ 心だけちょうだい <small>字余りを気にしないストレートな表現に好感。</small>	マラソン人落葉と共に駆け抜けて	枯草を温めてゐる月明り <small>枯草の美しさが際立つ様です。</small>	冬木立転がる太陽枝先に	父と行く母に内緒の酉の市 <small>内緒で行つて母を驚かすものを買うのだろうか。</small>	書を読みて充電の日々置炬燵 <small>ひとり静かな年末年始を過ごしている様子を描いている。</small>
森下山菜	新曆文	青木鶴城	能登航	荒一葉	秋谷風舎	河野凡士	しーしー	高原ひろし	網野月を	森佳月	新井史子	モヤシ	檜鼻ことは	西村青夏

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年十二月
一葉	修マスミ 稀香 幹子 亨		ことは	かげろう		凡士	土璃	道を京子	俳爺 稀香		亨		一葉を 月を	のり子 ひろし	
山眠る折り目正しく山の襞 <small>眠る山の襞を折り目正しいと捉えたのが手柄。</small>	鈍行のドア開くごとの寒さかな <small>寒風の直撃を避けるためドアから離れた席に座った。特急や、急行、快速が走る所では、鈍行の客は少ない。それだけにドアが開く度入って来る風は冷たく侘しい。鈍行は急行をやり過ごす時も時ドア開けばなしで寒いです。鈍行で寒さを描き上手いです。誰もが体験していることを、上手く表現されている。早く締まっしてほしい実感。</small>	忘年会あとの改札真顔の「ぴっ」	懐の鯛焼ぬくし帰り道 <small>御家族へのお土産でしょうか。一人で食べるより皆で食べる方が美味しい鯛焼です。</small>	地下鉄や寒夜の深き地の底に <small>地の底という表現が地下鉄の入り口の寒そうな印象を際立てている。</small>	城址や心の和む冬堇	野沢菜を漬け込む頃や冬其処に <small>中七下五がうまい。</small>	咲き群れて杜の灯となりし石落 <small>「杜の灯」という見立てが新鮮です。</small>	無住寺の金柑大樹子沢山 <small>「金柑大樹子沢山」のリズムが良い。無住寺と子沢山の対比がお上手です。</small>	蕎麦打ちの講座賑はふ十二月	除夜詣明けければ神の鈴をふる <small>蕎麦打ちの講座は十二月に限らないが、年越し蕎麦用となれば十二月で領ける。12月ならではの景です。</small>	悴むや酔うてベンチの「ここは何処」 <small>酔ってここはどこに共感。</small>	ポケットに色褪紅葉形なく	尊徳の本に落葉のしおりかな <small>「落ち葉のしおり」が詩的。実景なのででしょうか、偶然とは思えないくらいです。</small>	輝や指紋認証拒まれし <small>こうなる気持ち、わかります。</small>	
しんい	俳爺	石関六弦	立野音思	龍野ひろし	反町修	幸子	衛	みづる	丸山マスミ	光雲2	渋谷きいち	和田イチ子	小林土璃	本橋稀香	

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年十二月
たか子		ひろし		俳翁 霜里		ひろし 土璃					山菜	鶴城	たか子		
顔見知り増へし病院年忘 <small>年末から新年にかけて病院は休みとなる。そこで患者が薬を貰いに集まる。その中には顔見知りも多い。私もその中の一人。</small>	穏やかになほ穏やかな年の暮	霽降る石ころ路を急ぎけり	除夜詣明けなば神の鈴をふる	寒さうに暖かさふに日向ぼこ <small>日向に来る人は寒そうにもういる人は暖かそうという景をとらえて面白い。寒さうあたたかさふは季語になりうるがこの句には必要な語彙。厳冬の日溜まりの心地よさ、有り難さ。</small>	ウォーキングどんぐり踏まぬやうにして	小春日や隣の猫の無愛想 <small>本当は隣の猫も小春日がうれしい。暖かい空気が伝わります。</small>	万人に天の恵みや日向ぼこ	鍋つつき数へ日ともに語らずや	山茶花の大樹光陰重ね散る	枯野原そそり立つたる古墳群	冬晴るる傘寿野球の二刀流 <small>大谷さんのひいおじいさんだ。</small>	煤払いそろりそろりの五十肩 <small>年中行事も年々辛くなってくる？</small>	寒造樽に歴史のありにけり <small>毎年北国から杜氏が来て寒造りが始まる。蔵元では先祖代々の古い樽を使っている。歴史を感じさせる表現が上手です。</small>	古稀友とひととせ毎の新酒二合	
檜鼻ことは	日高道を	後記朝香	里谷光義	木村小麦	岡本たか子	佐藤幹子	染谷風子	小林京子	倉田詩子	かげろう	山本亨	霜里	後藤允孝	絵夢	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
	音思 鶴城 霜里	青夏	土璃	風子	稀香 しーしー 朝香 航	光雲2 風舎	マスミ 京子	佳月 かげろう 六弦 みづる	マスミ		のり子 佳月 しーしー	ひろし 霜里	山菜	朝香
脱ぎ捨てたセーターに猫まんまるや	熱爛や五臓六腑の有り処 寒い中を歩いてきたあとの一杯はうまいですね。熱爛の染みわたりに改めて五臓六腑が存在を知る。じんわりと沁みますね。	書を捨てて冬野を往くもまた楽し こもつていてはダメ。外へ出てこそ句を詠める。	落ち葉踏む盲導犬と白き杖 人物の両側に行く盲導犬と白杖に焦点を当てたのが効果的です。	終業を待てぬ目配せ柳葉魚酒 ししやもで熱爛はこたえられない。	広島弁姦し浜の牡蠣打ち場 牡蠣打ち場の賑わいが広島弁との相乗効果で上手く表現されています。威勢のよさが伝わってきます。姦しくカキ打ち場で広島弁が飛び交う中での喧騒に、浜の活気が感じられる。活気のある牡蠣打ち場の雰囲気が出ています。	日溜りは幸せだまり冬日和 「溜まり」、「だまり」の繰り返しは快く、「幸せだまり」の表現が秀逸である。上五中七下五と、心地よい言葉の繰り返しだが、作者の心持と景が、ともに小春日だったことが伝わってきた。	冬の波朝日に乗せて上陸す 冬の日本海か。牙をむいて岸に迫る波。「朝日に乗せて」の表現で救われる。下五の措辞が成功していると思えます。	茶を淹れた妻へ蜜柑を転がして さりげない愛情が見えます。夫婦の距離感をいろいろ想像させる。日常の切り取りが上手い。仲良しなのでしょう。口語体でさらっと軽いに、温かい和みの景が浮かぶ。	初雪に松吊る縄の白い傘 雪吊りといえば、やはり金沢兼六公園のそれ。うつすらと雪化粧して白い傘となった。今の金沢は大雪で風雅を味わうゆとりはないかも。	綿虫の木立縫ひくる清掃日 綿虫といえは、やはり金沢兼六公園のそれ。うつすらと雪化粧して白い傘となった。今の金沢は大雪で風雅を味わうゆとりはないかも。	冬の暮あなた影に恋をした 冬の恋を影で巧みに表現。影に恋するが良いですね。恋をしたのが過去完了か、現在完了なのか。うむ。	終りよし夫つくりたるおじやかな 鍋の締め、一年の締め。	恋慕知る炬燵蒲団の花もよう おそろいの花模様がいいなあ！	家古りて夫婦老いたり花八手 上五と中七に時の流れというわびしさを感じ、季語がよく合っている。
小林土璃	本橋稀香	能登航	新曆文	青木鶴城	河野凡士	荒一葉	秋谷風舎	網野月を	しーしー	高原ひろし	モヤシ	森佳月	新井史子	西村青夏

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年十二月
ひろし たか子 光雲2 みづる しんい 風子 道を しーしー			青夏	一葉 ことは 幹子 みづる	光雲2 修 允孝			ことは 鶴城 幹子 六弦 朝香			俳翁	佳月	曆文	風子 風舎 航	
波音にまさる風音鯉起し 北陸特有の嵐、豊漁でありますように。の日本海の荒海に雷が轟く光景は勇壮。冬の日本海を上手に詠まれている。波、風、雷、まさに冬の日本海。寒風による波音は高い。それをかき消すような鯉起しの雷鳴は凄まじい。荒波とそれを凌ぐ暴風、北陸の厳寒の海が目には浮かぶ。	かくれんぼ黍畑の声バトン継ぐ	寒昂ビルの灯紡ぐ丸の内	数へ日やよいお年をと口々に 来年こそはいい年にしたいね。	蜜柑むくあらそひのなきこの国で 絶えることのない戦争に對し、戦争のない日本の幸せを、季語「蜜柑」で表現されていました。不満、不安を思えばキリがないが、とにかく平和の有難さを実感する。	人生も何れ着地や落椿 人生の着地は椿のごとく潔くゆきたい。物事の憐れみを表現されたことと思われます。その通りですね。	ランナーのゼッケンは零冬日浴び	朝刊を配る少年息白し	白菜の尻ずっしりと道の駅 美味しそう、これはもう買って帰るしかありません。「尻ずっしりと」の措辞に白菜の存在感と美味そうな感じがたっぷり。暮れの道の駅に並べられた、白くみずみずしい白菜のどっしりとした姿を思いまづっしりとしている。ユーモラスな句。	銀杏散る飛石見えぬ朝の庭	暮早し鐘の響きも烟り初め	入日射す白山茶花に色置いて 息白しを身近で端的に詠んで言うことなし。	終活や賀状じまひの滲む文字	黒文字を銜へ余韻の晦日蕎麦 団塊世代の悪しき仕草だが自分も・・・。	陽だまりに犬の尿する開戦日 300万の英霊は犬の尿に過ぎないか？問題提起の句。戦争を皮肉って詠んだ反戦句だ。歴史的な日も忘れられてしまう。	
後藤允孝	絵夢	立野音思	俳翁	石関六弦	幸子	龍野ひろし	反町修	丸山マスマ	衛	みづる	和田イチ子	光雲2	渋谷きいち	森下山菜	

		88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和五年十二月	
		しんい 絵夢	しんい		絵夢 凡士		月を	暦文		音思	山菜					
		風や関東平野を縦に裂き <small>ダイナミックな景。縦に裂きが風の荒々しさを上手く表現している。</small>	パジエンヌを気取り落葉舞ふ中を <small>絵になりますね。</small>	みぞるるや肩寄せ合ひて赤き実の	歳月や賀状じまひの筆仕舞ふ <small>終活に向けた一つ一つの準備が見えてくる。私も今年で最後、永年毛筆でしたためられたことに敬意。</small>	常宿の白磁の小鉢菊なます	仏壇の灰を均して夜の朧 <small>「朧」は春かも知れませんが、心境でしょう。</small>	朝霧に斜光煌き初シヨット <small>多分ナイスシヨットですね。</small>	年末闘争やれる会社が羨まし	湯気立つや期末試験の最終日 <small>寒い季節の一コマをうまく捉えている句です。</small>	鯛焼き割り頭をくれる老母かな <small>僕は尻尾がいいんだけど。</small>	レノン忌やイルミに集ふエトランジエ	上等な仕立てのスイーツ年新た	初日待つ紺青の海平らかに		
		日高道を	木村小麦	後記朝香	里谷光義	佐藤幹子	岡本たか子	倉田詩子	染谷風子	小林京子	霜里	かげろう	山本亨	しんい		